



Title	大都市圏整備・開発の国際比較による地域計画学的研究
Author(s)	許, 垣
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/39743">https://hdl.handle.net/11094/39743</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏	名	ほ	う
		許	垣
博士の専攻分野の名称		博 士 (工 学)	
学 位 記 番 号		第 1 2 4 9 5 号	
学 位 授 与 年 月 日		平 成 8 年 3 月 25 日	
学 位 授 与 の 要 件		学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻	
学 位 論 文 名		大都市圏整備・開発の国際比較による地域計画学的研究	
論 文 審 査 委 員		(主査) 教 授 紙野 桂人 教 授 舟橋 國男    教 授 柏原 士郎    教 授 森 康男	

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、世界の各地域において中心的機能を果たしていると思われる主要都市圏及び都市を取り上げ、各々の地域特性、第2次大戦後の社会経済環境の動き、そして主要政策目標及び戦略等の点検・分析を通して明らかになった点を比較考察すると共に、都市構造上特に注目される都市圏及び都市地域について、主として都市機能の郊外分散（都市周縁化）の多様な仕組みを把握して、新たな都市圏構造の形成誘導を図る計画条件を考察し、今後の地域の整備・開発計画を推進するにあたって課題とすべき政策的諸条件を示すことが主な目的である。すなわち本研究は都市の中心部よりも周縁部の都市形成に着目した新しい視点を考慮しているものである。

本論文は、全3部8章より構成している。

第1章は序章であって、本研究に取り組む着眼点や研究目的、研究方法をのべている。第Ⅰ部は、大都市圏レベルの都市周縁化の動きを国際的に比較研究したもので第2章と第3章、第4章によって構成されている。

第2章では、本研究における基礎的考察としてヨーロッパとアメリカ、アジアの諸主要国大都市圏の主として戦後における発展動向について考察を行っている。

第3章では、戦後において世界経済の中心地としての役割を果たし、特にこれからの成長が注目される主要3大都市圏（大阪湾ベイエリア、オランダのラントシュタット、サンフランシスコベイエリア）について、社会経済環境の動向及び近年における当該圏域に対する主要政策を中心に取りまとめている。

第4章では、それらの比較と取りまとめを行っている。

第Ⅱ部は、前章を受けて都市圏での諸機能の分散集積の動きを明らかにし、政策効果を確認したもので第5章と第6章によって構成されている。

第5章では、第3章で取り上げた3大都市圏の中から、戦後において特に急速な都市成長を遂げてきたと思われる3つの都市地域（北大阪地域、ロッテルダム市、サンノゼ市）を対象とし、社会経済環境における経年の動きを明らかにすると共に、当該都市地域に対する国家政策や当該地方政府が目指している主要政策目標・戦略及び整備方向などを明確にしている。

第6章では、それらの比較と各地域特性を論じ今後の都市圏整備に向けた示唆を抽出している。

第Ⅲ部はまとめであり、第7章と第8章で構成されている。

第7章では、本研究を通して必要と思われる計画思想の新しい潮流について取り上げて、各々について考察し、

第8章では、以上の考察を通して明らかになった点とこれからの都市機能の分散集積を目指す大都市圏整備・開発計画を推進するにあたって、ガイドラインとすべき政策的諸条件を示すと共に、研究自体の今後の課題も明らかにしている。

### 論文審査の結果の要旨

世界の主要な大都市圏において、共通して郊外地域の成長（周縁化）と都心の構造変化が進展し、多様な都市問題が経験されてきた。この動向は、1980年代後半から新しい趨勢に入り、郊外圏の機能が初期の住宅都市的段階から自立複合型へと展開する方向が見える。これによって単一な核を持った従来の巨大都市から、複数の分節核を持った連合型都市圏への移行が仮説として意識され始めている。本論文はこの仮説の検証と新たな都市計画思想の模索を、都市の国際比較研究によって試みたもので、次のような成果を得ている。

- (1)世界の主要大都市圏について、第二次世界大戦後の都市政策の流れを通観するとともに、多核連合型都市圏の基礎条件を備えている大阪湾バイエリア圏、オランダのラントシュタット圏、アメリカ合衆国のサンフランシスコバイエリア圏の整備・開発条件の把握と分析を行い、それらの都市的諸条件、都市構造、経済社会動向の諸動向を明らかにしている。その結果は、これまでの都市計画研究では未開拓の現代都市比較分析成果として、極めて豊かな情報量を持ち有意義である。
- (2)上記3大都市圏の地域形成過程とその構造特性について、地域ブロック範囲における諸統計総括を実施し、これまで統計上の地区又は都市単位で把握されていた都市の実態を、計画的な地域単位で横断的に捉える新たな視点と、情報提示に取り組み、的確な成果をあげている。
- (3)3大都市圏にわたる多数の圏域自治体の聴取調査を実施して、一般情報を上廻る現実の動向把握を行い、現実の都市政策課題の抽出に成功している。
- (4)上記諸データに基づく考察を行い、目標とする連合都市圏形成への動きを把握するとともにその計画課題を得、新たな計画的取り組みへの示唆を導いている。

以上のように本論文は、都市周縁化における自立連合型都市圏形成に向けた動向仮説の実証を試み、一定の裏付けを導くとともに、現実に即した地域計画研究の成果がみられ、都市計画学上有意義な情報の提示に成功している。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。